

空輪径よりも風輪径が明らかに大きい。14と16は各輪正面に発心門の梵字を陰刻する。17・18は小型品であり、17は銘文に「童子」とある。17は火輪の軒口が厚く、両端の反り上がりが低い。19・20は柄式であり、いずれも各輪正面に発心門の梵字を陰刻する。19は銘文のうち年月の記載が小さく、20は銘文が地輪正面に書ききれず、左側面にまで及んでいる。また、火輪の軒上辺端の反り上がりは19が三角形状で、20が細長く直角に近い角度である。21は宝聚院の過去帳に記載のある僧侶の石塔であり、各輪正面に法名が分けて記載されている。地輪は縦長で、水輪のくびれが浅く、火輪の屋根は屈折している。また、風輪は扁平で、空輪は宝珠形を呈する。

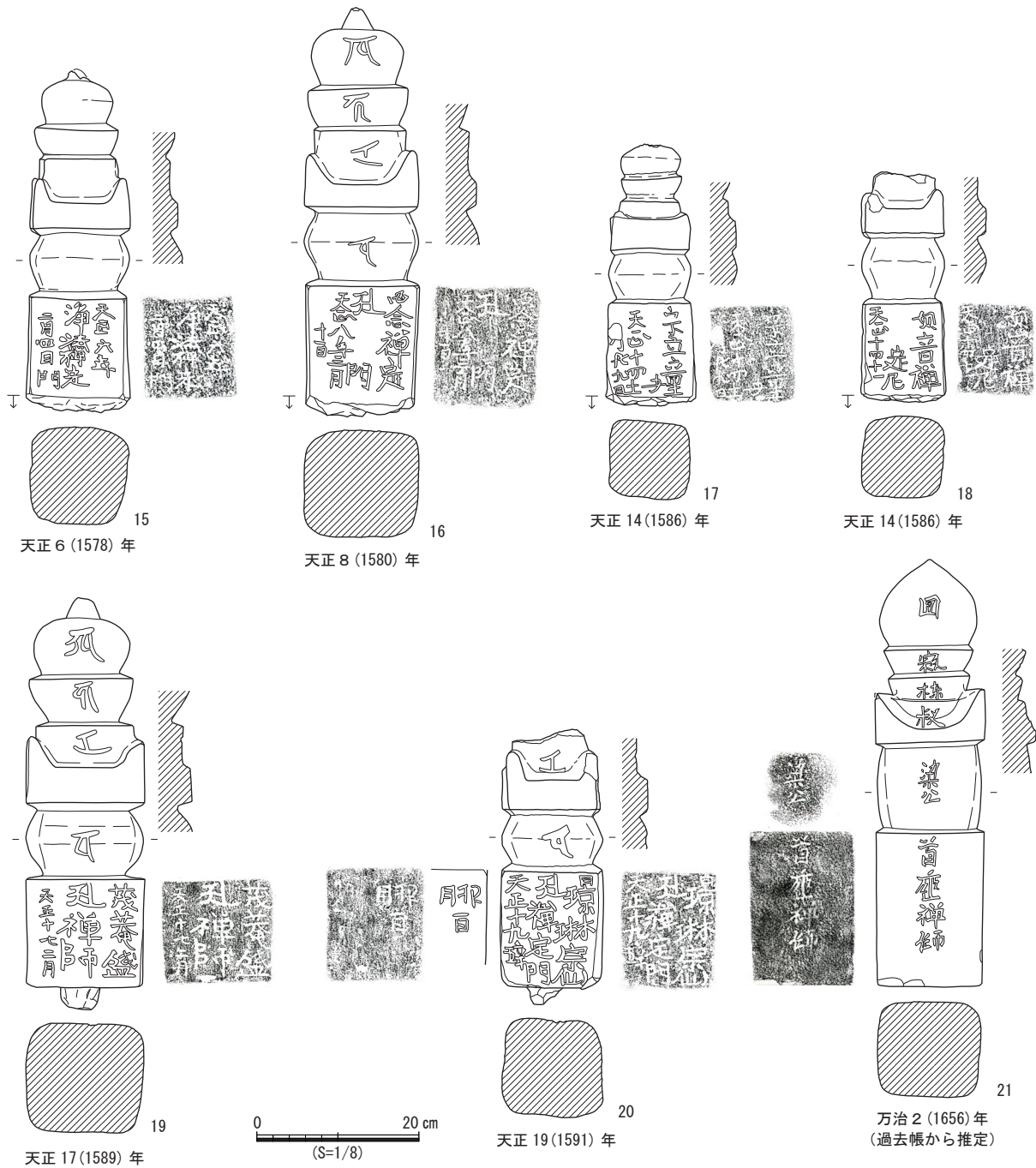


図 8 宝聚院石塔実測図 (2)

天喜寺（大垣市上石津町一之瀬）

天喜寺は天喜5（1057）年の創建とされ、近江国に所在した寂室円広禅師の法を嗣いだ雙桂定巖和尚が貞治5（1366）年に開山したとされている。当初は天台宗であったが、後に臨済宗に改宗した（上石津町教育委員会 2004）。寺域内の墓地には複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔や石仏が並べられており、そのうち一石五輪塔1基を図示した（図9）。

22の銘文には「文明三」（1471年）とあり、天喜寺の一石五輪塔の中では銘文の年代が最も古い。地輪は縦長であるが、下方の約3分の1を地中に深く埋め込むため、機能時には横長に見えていたと考えられる。水輪は球形を呈し、その横断面形は円形に近い。火輪は軒上辺中央が直線的で、両端に向かって緩やかに反り上がり、軒下辺も両端でわずかに反り上がる。また、隅棟は緩やかに湾曲する。

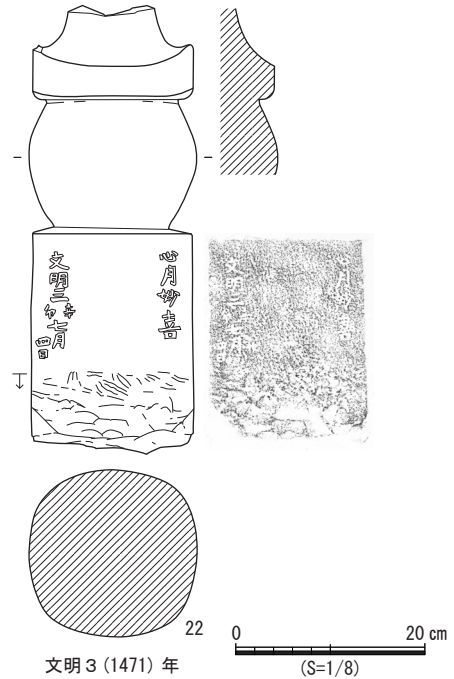


図9 天喜寺石塔実測図

大通寺（養老郡養老町宇田）

大通寺は臨済宗妙心寺派の寺院であり、土岐悪五郎康貞の菩提寺で、同人を開基とする。応永年間（1394～1428）の創建であり、関ヶ原の戦いにて堂や記録類が焼失したとされている（養老町 1978）。当地には宇田城があったとされ、寺域内の墓地には複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が並べられており、そのうち一石五輪塔2基、台座1基を図示した（図10）。

23は地輪幅が広く、重量感のある石塔である。地輪底面の形状は尖り気味で、剥離痕が未調整のまま明瞭に残る。24は地輪正面下方に線彫りの格狭間を有する。水輪の最大径は中央からやや上に

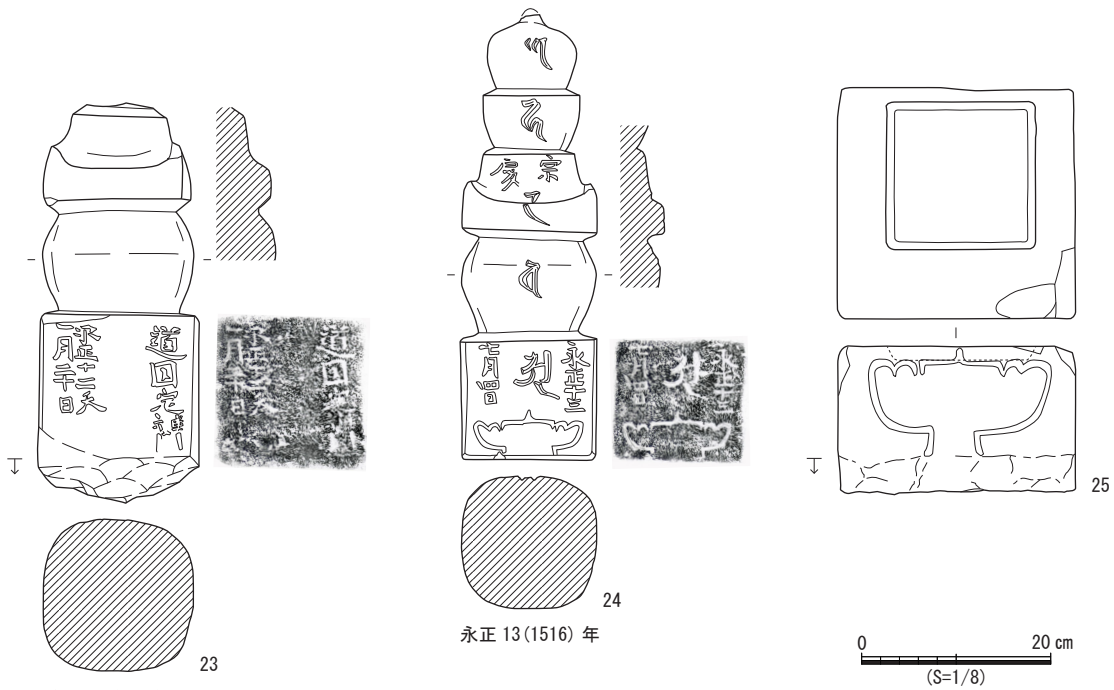


図10 大通寺石塔実測図

位置し、火輪の軒上辺は中央から両端に向かって緩やかに反り上がり、空風輪のくびれは深い。また、火輪屋根に「宗慶」、地輪右側に年、左側に月日を刻み、各輪正面に発心門の梵字を陰刻するが、火輪の梵字は屋根から軒口にかけて刻まれている。なお、24の地輪底面にはコンクリートが貼り付けられており、地輪底面が浅く窪んでいることは観察できるが、安置式か柄式かの識別はできなかった。25は一石五輪塔の地輪下端を落とし込む形態の台座と考えられ、上面には一辺約15.7cm、深さ約1.5cmの方形の割り込みがある。また、割り込みの前面（格狭間のある面側）には幅7.2cm、背面には幅1.5cmの輪郭があり、前面の空間が広い。台座正面には格狭間が大きく線彫りされ、格狭間の脚から下側は剥離痕が未調整であることから、その部分は地中に埋められていたか、基壇が伴っていたと考えられる。



写真2 大通寺台座 (25)

西光寺跡（養老郡養老町直江）

西光寺は養老町直江字経堂という地にあったが、洪水のために同字村下に移転したとされている。当初は天台宗であり、応永17(1410)年に時宗に改宗した(養老町1978)。移転前の土地は、「直江志津日本刀鍛錬所跡」として町史跡に指定されており、大型の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が集積し、宝篋印塔の部材には阿号の銘文を有する近江式の基礎もある。このうち、一石五輪塔2基を図示した(図11)。

26は柄式であるが、柄が欠落している。地輪は横長であり、水輪の最大径は中央より上に位置する。地輪正面の摩滅が進行しており、銘文の積読は困難であった。27は安置式の大型塔であり、法名に阿号がある。水輪は球形を呈するが、その横断面形は隅丸方形に近い。火輪は軒口が厚く、軒上辺は中央から両端に向かって緩やかに反り上がる。また、部分的に火輪上辺と空輪下辺の識別が漸移的であり、火輪上辺幅よりも風輪下辺径の方が大きい。風輪側辺は直線的で内傾しており、空輪の頂部は右側に傾いている。なお、27は各輪ともに扁平化しており、幅に対して奥行が短い。

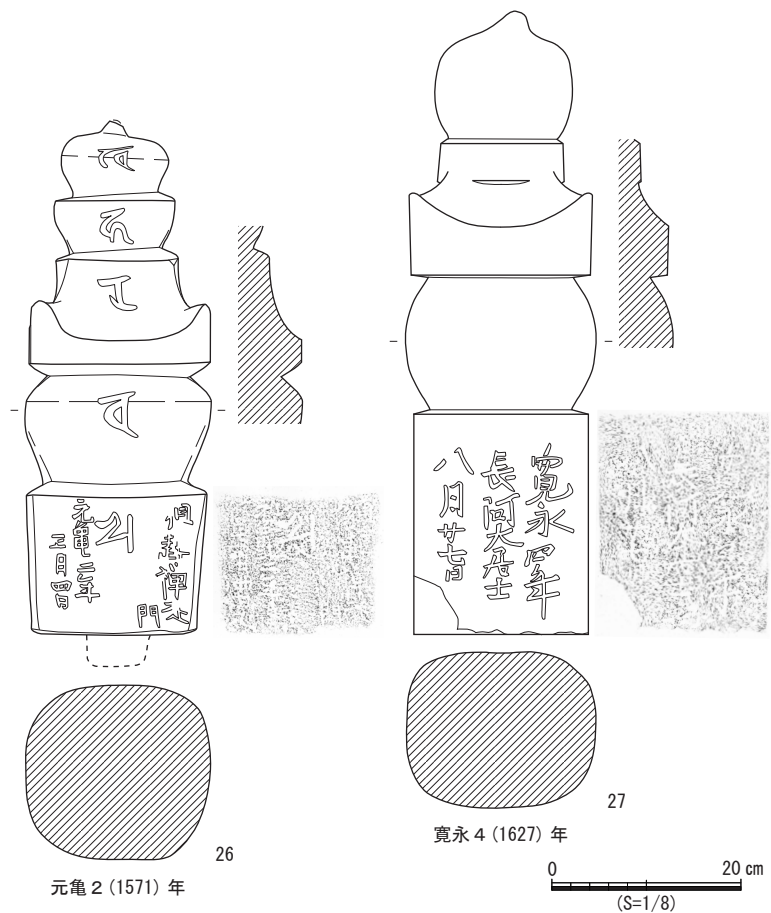


図11 西光寺跡石塔実測図

浄誓寺（養老郡養老町石畑）

浄誓寺は、当初は天台宗で誓願寺と称していたが、明應4（1495）年に浄土真宗に改宗し浄誓寺と称した。創建年代は不明で、織田信長の兵火により焼失したとの説もある（養老町1978）。境内にある地蔵堂及びその前面には、複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔、無縫塔などの石塔やその未成品、石仏が並べられており、そのうち一石五輪塔11基、一石五輪塔未成品2基、台座4基を図示した（図12～14）。

28～31は埋込式、32は柄式で、いずれも空風輪を欠く。28は浄誓寺の一石五輪塔の中では銘文の年代が最も古く、「妙幸」の下に「廿六日」が刻まれており、他の一石五輪塔と異なる文字の配置である。29は地輪下方に敲打痕が明瞭に残り、底面が突出している。30は地輪が縦長であり、梵字

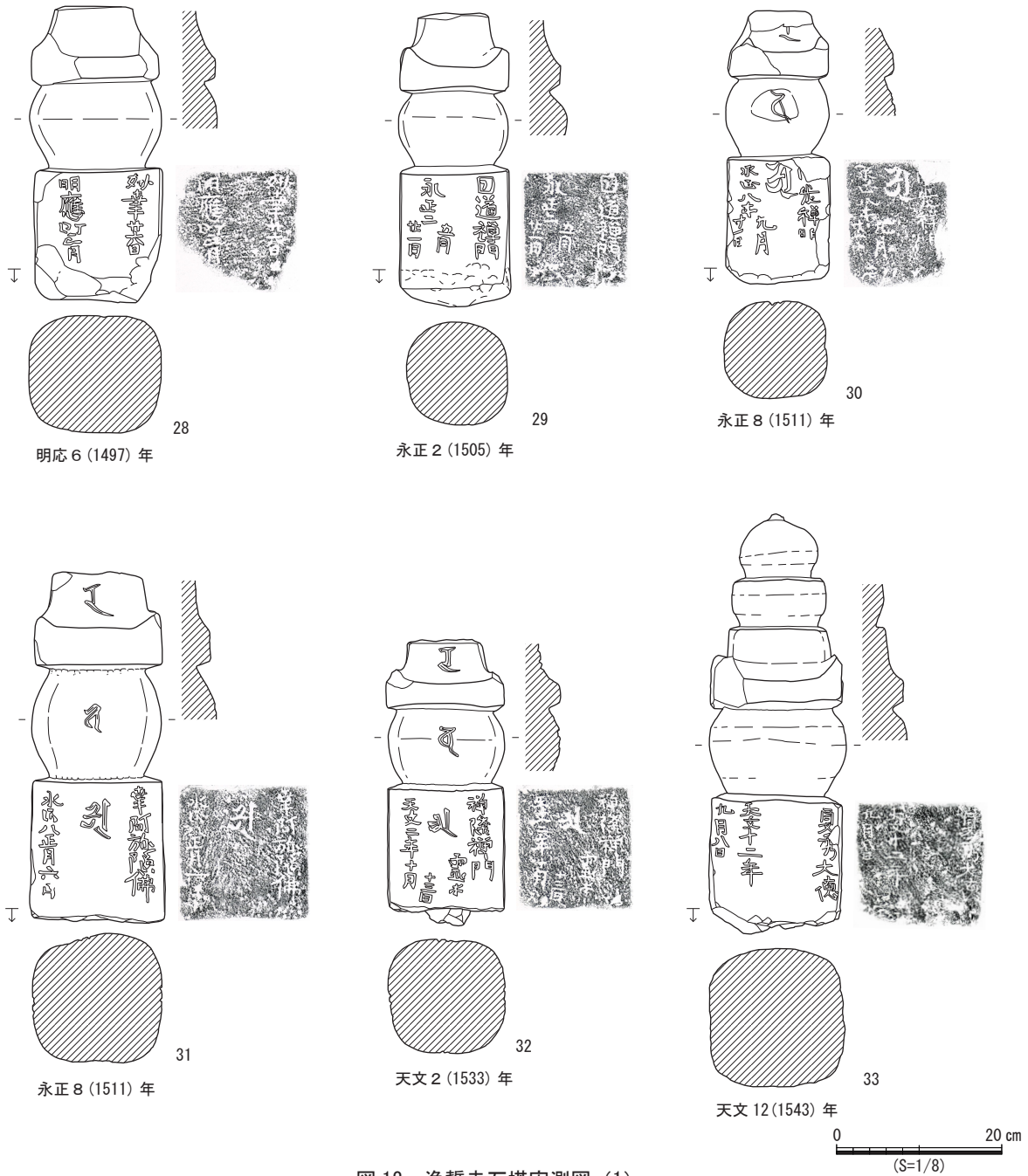


図12 浄誓寺石塔実測図（1）

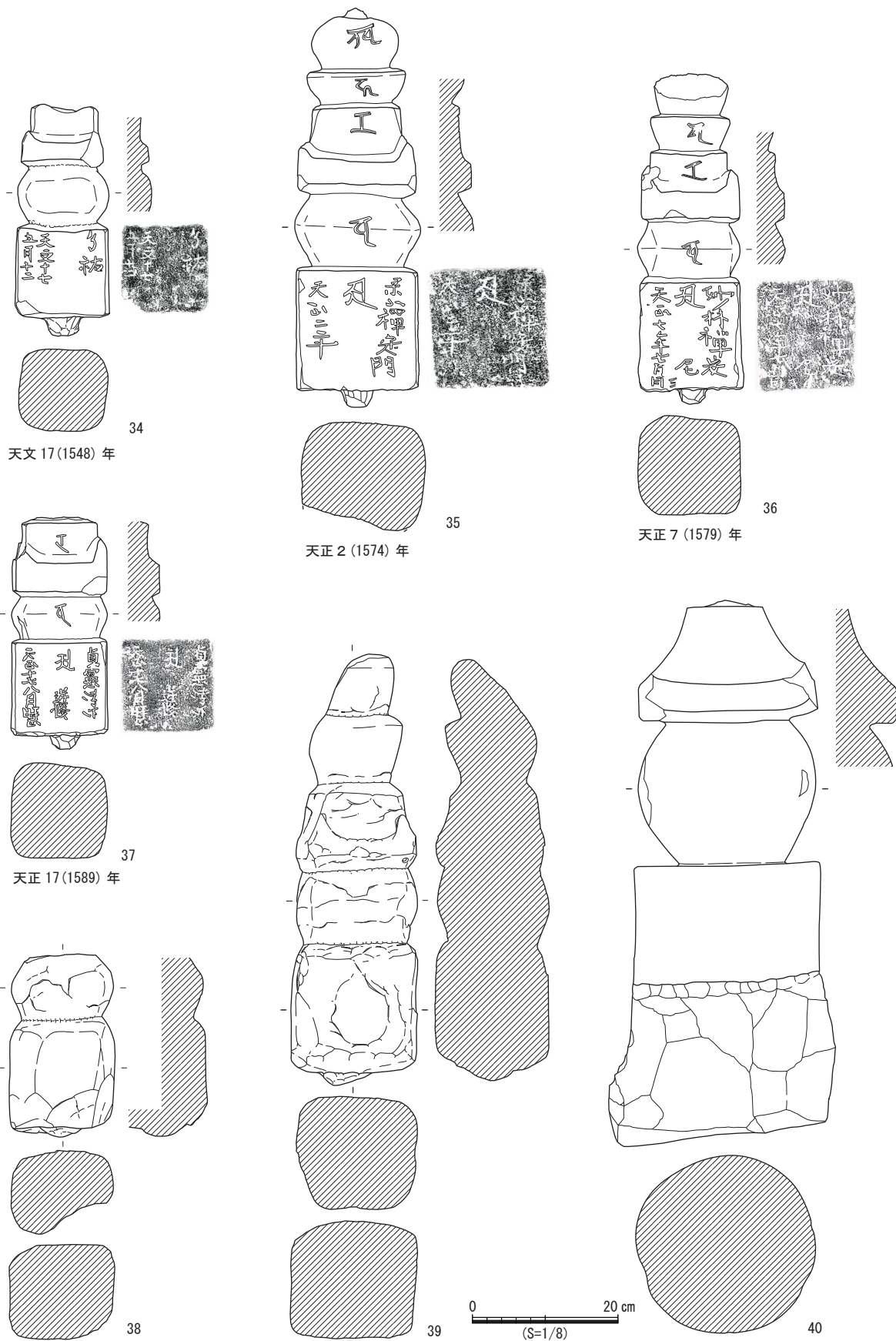


图 13 淨誓寺石塔実測图 (2)